



素材を差し込み、手に代わって投げ玉の操作をする機械。昭和初期に製造された編み機は、「道具と機械の中間」のようなものだという。

主 伝統の手技

第十八回

巧みな手技が操る
昭和初期製の編み機。
豊田勇さんの思いの通り、
「カッシャン、カッシャン」と
リズムカルに音を刻む。

涼を呼ぶ簾から歌舞伎に不可欠な簾まで、あらゆる簾を作り続けてきた伝統の手技。日本の風物詩を彩る職人が、ここにもいる。

文/山川敦司 撮影/村上兼久



江東区無形文化財と記された
伝統工芸保存会の会員章。

歌舞伎用の簾を作ってきた
伝統の手技が
家の誉だ。

君待つと 吾が恋ひ居れば
吾が屋戸の 簾うごかし
秋の風吹く

これは額田王が天智天皇を思
い、「あなたを訪れを待つて恋
しく想っておりますと、私の家
の簾を動かして秋の風が訪れて
まいります」と、詠んだ万葉集
の歌だ。

その昔、吹いて来る風は恋す
る人の来訪を告げる予兆とされ
ていたのだとか。簾越しに流れ
る心地よい風を感じながら、恋
する人に思いをはせる――。な
んとも哀愁漂う歌ではないか。

中国の御簾を原形に、平安時
代には宮中で間仕切りとして使
われた簾が、庶民の生活で用い
られるようになったのは室町時
代に入ってから。その後、江戸
時代には多くの簾職人が店を構
えた。

「隅田川の向こう側が浜町で、
昔は柳橋まで料理屋がズラッと
並んでいて、5月末になるとど
の店も襖や障子を簾戸に替える
んです。簾屋にとって料理屋は
お得意さんだから、裏通りには
必ず簾屋があったもんですよ」
そう教えてくれるのは、新大

橋の袂で明治37年から老舗簾店
を営む「豊田スダレ店」三代目
の豊田勇さん。七十三歳ながら、
その骨太でガッチリした身体と
精悍な面持ちには、いぶし銀の職
人さんといった感じだ。

簾は均質で細長い素材と、そ
れを編む糸のみで構成される実
にシンプルなもの。だが、シン
プルであるがゆえ、その背景に
は職人ならではの巧みな技術が
隠されている。

簾の素材は、竹、萩、蒲、葦
など水に強く伸縮性が低いもの
が用いられる。

「ただし、栽培したものは弱く
てダメ。やはり雑草と一緒に生
えているものに限りませぬ」
それらを入念に選別し、特別
に縫られた糸で編んでいく。

二十坪ほどの作業場の一角に
据えられた昭和初期製の編み機
が、カッシャン、カッシャンと
小気味いい金属の残響を響かせ
る。

「ほとんどの道具は祖父の時代
からのもので、竹を割るのに使
うナタは江戸時代に町人が使っ
ていた道中差しの頭を落とした
ものを今でも使用しています。



伝統の手技
大

豊田 勇

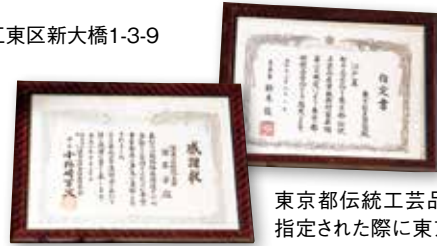
Toyoda Isamu

1938(昭和13)年、東京生まれ。小学校時代から初代簾職人の祖父・丑次郎氏の背中を見ながら店の手伝いを始める。高校時代は陸上部で活躍。中央大学商学部へ進み、入部した山岳部では北アルプスのほか日本各地の名峰に登頂。1961(昭和36)年、大学卒業と同時に父盛雄氏のもとで簾職人として本格的に仕事を開始。1983(昭和58)年、江戸簾が東京都伝統工芸品に認定され、1986(昭和61)年、江東区無形文化財となる。2008(平成20)年には、その卓越した技能に対して「東京マイスター」の称号が贈られる。2009(平成21)年、東京都中小企業振興公社主催の伝統工芸品チャレンジ大賞で優秀賞を受賞。近年はタバコの臭いの軽減や、シックハウス症候群などのアレルギー予防に効果が期待される光触媒(酸化チタンコーティング)技術を施した簾を製作し、江戸簾の基本を大切にしながら、その時代にあった簾の製作に挑み続けている。趣味はスポーツ観戦で、大学駅伝の大ファン。

有限会社豊田スダレ店 東京都江東区新大橋1-3-9
TEL:03-3631-3687



震災で現在の場所に移転する前は、芭蕉記念館の正面に店舗を構えていた。割れ、ねじれ、虫食いなどを調べ、選別した材料を太さ別に置いた店先。新大橋の杖にある豊田スダレ店は、高級簾専門店として明治37年に創業した。



東京都伝統工芸品として指定された際に東京都知事より贈られた認定書。

社会福祉協議会から江東区伝統工芸保存会に贈られた感謝状。

豊田さんの座右の銘は「コンスタントに同じものを作り上げること」。

【製造工程】(竹を素材にした場合)

- ①材料選び、節取り
作る製品の大きさや種類により、竹の太さや色合い、節合わせや曲がりなどを見極めて選ぶ。竹によっては節が大きいものがあるため節で削り、平らにして節を調節する。
- ②割り
1本1本、刀で竹の真竹を割り、箆状にする。それぞれ異なる竹の性格に合わせて、長さや幅を均一にするのは熟練を要する作業だ。
- ③煮出し、油抜き、色出し
湯で煮出し、油抜きをしたり、特殊な方法で色出しをする。
- ④天日干し
束ねたものを、約1週間、天日干しにする。
- ⑤編み込み
昭和初期に製造された編み機で、箆に糸をしっかりと編んでいく。
- ⑥縁竹付け
縁に付ける竹を、簾の幅に合わせて切り、丁寧に簾に結びつけていく。
- ⑦断ち
編み上がった簾の両端を、鋏で断ち落とし、切り揃える。豊田さんは、1分5厘(1cm、5mm)などの寸法を、フリーハンドで正確に切っていく。
- ⑧仕上げ
最上部に棧を付け、金具をつけて出来上がり。

江戸簾

室内を暗く涼しくするために生まれたのが京簾。江戸では海風が涼しいため、床下の隙間に穴を開け、揺れることで風が見える仕組みを考えた。それが江戸簾の特徴だという。また、京簾は装飾性を重んじるが、江戸の簾は生活に密着した。だから寿司の海苔巻きや、そば用の小物簾とその種類も多彩。語源は、すのこ状に並べて編んだ竹や葦などを垂らして使うため「すのこ垂れ」から「すだれ」になったという説が有力。



網糸に絹を使い、西陣織の布で縁取りをした簾の見本。

作業場に飾られた簾の見本。軒下の簾は強い日差しを遮断すると同時に、プライバシー保護の役割もかねている。

竹を割ったような性格なんてえのは真っ赤な嘘。
竹には微妙な曲がりがあるんだ。



編み上げた素材の両端を切りそろえる鋏。豊田さんの手にかかれば定規を当てたような仕上がりになる。

歌舞伎用簾の製作に使用する投げ玉。素材は椗で、簾の大きさや種類によって、投げ玉の形や大きさ異なる。

竹割に使用するナタと小刀各種。上から3、4、5本目は江戸時代の道中差し。昭和刀とは切れ味が全然違うそうだ。

昭和刀も使ってみましたが、なんとなくしっくりしなくてね」
そう苦笑いする豊田さんは、この作業場で先達が残した道具とともに、簾職人として半世紀にわたる歴史を歩んできた。

昭和13年、老舗簾店の三代目として生まれた豊田さんが、家業を手伝うことは、ごく自然なことだった。

「簾屋の場合、本数を数えるとか竹を洗うなんていう仕事は、子供でもできますからね。学校から帰ると、これが終わったら遊びに行ってもいいよ」って。それが当たり前でした」

子供の頃から運動神経は抜群。高校時代に夢中になったのが山登りだった。

「その頃になると、なんとなく跡継ぎの話が出てくるでしょ。だから、4年間山登りさせてくれたら跡を継ぐから」と親を説得して大学へ行かせてもらったんです」

入学と同時に山岳部に入り、北アルプスをはじめ、日本各地の名峰を縦走した。

「好きだったのが、人の手が入っていない未開の山。中でも天

けないから、材料は竹箆たけひらを使う。だから竹割りができないとダメ。ところが、竹を割ったような性格というのは真っ赤な嘘で(笑)、竹には微妙な曲がりがある。それを数ミリ単位で、均等に箆状にしていくのは経験が必要。つまり、長年の感覚だけが頼りということになるんです」

祖父・丑次郎さんは竹割り名人として知られた職人で、「若い頃はよく、お前は竹に逆らっている。竹の性格に合わせてれば竹のほうから割れてくれるんだぞ」って言われたもんです。が、当時は意味が全然わからなくてね。それがわかるようになってきたのはずっと後になってからでしたよ」

加えて歌舞伎用の簾を作るためには、技術的なことはむしろのこと、歌舞伎に精通していなければならぬ。

「親父が死んだあと、初めて歌舞伎の仕事依頼されたのが三十一歳の時。演目は『一条大蔵卿』。その芝居は三枚三枚の簾の真ん中から役者が出てくるのが見せ場で、六枚で仕上げるものだったんですが、芝居の知識がない私は、間口の寸法から

気の境目で仏の後光(ブロッケン現象)が現れる大朝日岳には、よく登りましたねえ」
ところが、山仲間の家で夕食をご馳走になっていたときのことで。

「その頃、谷川岳の遭難事故が年がら年中新聞に載っていて。お父さんがしみじみ言うんですよ。(息子が)帰ってくるまで、酒がうまくないんだよ、って。そのとき、ふと、うちの親も同じ気持ちなんだろうなあ、と。それで、もうそろそろ山登りも卒業かな、と」

約東通り、大学卒業と同時に簾職人として仕事を始めた豊田さん。だが昭和40年代後半からのエアコンの台頭で、簾の需要が激減。同業者は次々と廃業に追い込まれ、全盛期には60名以上いた組合も解散。だが、豊田スダレ店には、特化した「手技」があった。それが歌舞伎用簾の製作だった。歌舞伎の舞台では、簾の影から役者の所作を見ながら長唄を歌ったり、お囃子をすするため、下手にも上手にも簾が掛けている。

「これは遠目がよくなけりゃい五枚が常識と、五枚で作ってしまった。そしたら、役者が出られなくなっちゃって(笑)。あのときは、えらく怒られましたねえ」

役者によって見栄の切り方がそれぞれ違うため、簾の長さが変わってくる。つまり、役者の特徴と演目の流れが頭に入っていないと、歌舞伎用の簾は作れないというわけだ。以来、豊田さんは東京だけでなく京都へも足を運び、芝居を観続けてきた。

「現役である以上、幾つになっても勉強を怠っちゃいけない。職人なら、やっぱりその気持ちを持ち続けなきゃダメですね」
光を遮ることで風をコントロールし、快適さを提供してくれる簾。それだけではなく、簾は人間と風景との間にほんやりした空間を作り出してくれる。

「隠れる様でうっすら見える、外だか内だかわからないこの曖昧さが、もしかしたらイエス・ノーをはっきり言わない日本人の性格に合っているのかもしれないね」
なるほどなあ……。思わず膝を打つ私の横を、一陣の涼風が通り過ぎていった。